

名勝旧大乘院庭園発掘調査(第318次)現地説明会資料

(財)日本ナショナルトラスト

奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部

2000年11月18日(土)

1. はじめに

奈良国立文化財研究所は、(財)日本ナショナルトラストによる「名勝旧大乘院庭園保存修理事業」の一環として1995年から発掘調査をしています。今回の調査では池の北西部を発掘しました(図1)。調査の目的は池の歴史の変遷を明らかにし、護岸を復元整備するための資料を得ることと、今後の庭園整備の方策を検討するために池の北西の陸地部分の状況を明らかにすることです。調査面積の合計は約500㎡です。調査は10月初旬に開始し、現在も継続中です。

2. 大乘院庭園の歴史

大乘院は一乗院とならぶ、興福寺の門跡の一つです。藤原氏の氏寺である興福寺には、平安時代以降には摂関家の子弟が僧として高い地位につきました。彼らが住んだ寺院を門跡と呼んでいます。

平安時代

大乘院は11世紀末に創建されました。初めは今の奈良県庁の位置にありましたが、1180年の平重衡による東大寺・興福寺焼き打ち後、大乘院門跡が兼務していた元興寺の別院・禅定院のあった今の場所に移転しました。

鎌倉時代

寝殿造の建物が池の西側に建っていたことが史料で知られています。

室町時代

興福寺180世別当(寺院運営の最高責任者)で大乘院第20代門跡の尋尊大僧正が、庭師として有名な善阿弥を京都から招き、庭園を改造しました。もともとあった東の大池と島を結ぶ橋を架け、西側に新たに小池がつけられたと考えられています。そして、大乘院は南都随一の名園といわれるようになりました。善阿弥は将軍のいた室町殿(花御所)や銀閣寺で有名な東山殿(慈照寺)の庭づくりにも関係したと考えられています。また、尋尊は室町中期の重要な史料として有名な日記『大乘院寺社雑事記』を残しました。

江戸時代

奈良国立博物館の横に移築保存されている茶室(含翠亭)などが建てられました。また、それに伴って、西小池が拡張されたと見られています。江戸時代末には隆温大僧正の筆によるといわれている「大乘院四季真景図」が描かれました。

明治時代以降

明治初めの廃仏毀釈の影響で庭園は放棄され、だんだん荒れ果てていきました。1909年に北側に奈良ホテルが開業し、その後庭園の一部にはミニゴルフ場やテニスコートがつく

られました。また、池そのものも、東大池の北岸や西小池の一角はすべて埋められ、更に庭園の東の一角は県道の拡幅で削られてしまいました。

そして最近では

大乘院庭園についての研究の高まりや保存運動の結果、1958年に国の名勝に指定され、1974年に最初の整備がおこなわれました。また、1995年からは発掘調査をもとにした庭園の整備が開始され、1996年には東大池の南側に大乘院庭園文化館が開館しました。

3. 「大乘院四季真景図」

「大乘院四季真景図」は、大乘院門跡隆温大僧正(1811~1875)が描いたものといわれ、江戸時代の大乗院庭園の様子が詳細に描かれています(図2)。この「真景図」と、現在の庭園とを比較すると、西小池とその北側の茶室(含翠亭)やその他の建物群が注目されます。現在では西小池は一部を残して埋められ、建物も残っていませんが、「真景図」によると、西小池には「ヲシマ」、「メシマ」などの小島があり、それらをつなぐ石橋が架けられ、池の内外に数多くの大小の景石が巧みに配置されています。また、池に張り出した建物も見られるなど、多彩な光景が展開していたことをうかがうことができます。

今回の調査区は「真景図」では東大池の北西岸および西小池の北東部分一帯にあたると思われ(図3)。

4. 前回までの大乘院庭園の発掘調査でわかったこと(図1)

池の北岸：陸部分は近代に土が盛られて大きく変化しました。

北中島：地山を削ってつくった基礎に、土を盛り上げてつくられました。

池の東岸：中世・近世の庭園の状態を比較的よく残しています。

三ツ中島：近世につくられたものです。

池の南岸：当初は自然の地形を利用したものでしたが、中世以降に徐々に埋め立てられ、汀線が北に移動しています。

池の西岸中央部：埋められていた西小池の一部や水路、石組などを発見しました。

5. 今回の主な検出遺構(図4)

検出した遺構を4つの時期に分けて説明します。I期は近世以前で、中世に遡る可能性もあり、II期は近世で「真景図」に描かれている時期、III期は近代で、西小池が埋められ、奈良ホテルの建設に伴い、大規模な土地造成がおこなわれた時期と考えています。IV期は現代です。

I期

調査区のほぼ中央付近で検出した土管理設溝の底の部分では、II期の盛り土の下に池底の堆積土層とみられる粘土層が東西に続いている状況が確認されます。

II期

・溝(溝1、溝2、溝3、溝4)

溝1は東大池の西岸からはじまる素掘りの溝で、ゆるやかに蛇行しながら北西に伸びて

います。約13mにおよぶ範囲を検出しました。幅約1.5m、深さは最大0.8mで底面は北西方向に少しずつ深くなっていますが、想定される東大池の水位より高く、また水が流れていた形跡がありません。調査区の北端近くの南岸には、大きな石が数個据えられた跡があります。

溝2は幅約0.8m、深さ0.4mの素掘りの溝です。溝1から南方向に分岐しており、さらに調査区の南に続いています。この溝も水路としての機能はなかったとみられます。

溝3は長さ約9m、最大幅約0.8m、深さ約0.4mの南北溝です。溝4は長さ約8m、最大幅約0.5m、深さ約0.4mの東西溝です。溝3・4は調査区北西部にあり、溝3は溝4より新しいことがわかっています。いずれの溝にも水が流れたり、溜まっていた形跡はなく、場所によっては底が急にすぼまった形になっています。後で説明するように、この溝3、溝4は垣根をつくるための布掘り状の掘形であると考えられます。

・柱穴列

調査区の北西辺で東西に並ぶ3つの柱穴を検出しました。柱間寸法は約2mです。いずれも底に礎板石（柱の下に置いた石）が設置されています。

・高まり（高まり1、高まり2）

高まり1は、東大池の西北隅近くにあり、周り比べると0.6mほど高くなっています。Ⅲ期に厚い盛り土を施すことによってかさ上げされ、規模も大きくなりました。高まり2は、反り橋の西側にある築山風の高まりで、現状での高さは1.5mほどあります。この高まり2も高まり1と同じようにⅢ期に厚く盛土が施されており、Ⅱ期には、ひとまわり小さく低いものであったと見られます。

・落ち込み

反り橋付近に岸と思われる落ち込みを検出しました。

Ⅲ期

・排水暗渠の掘形

池の排水用として現在も機能している暗渠があり、その掘形を検出しました。暗渠の入り口はレンガでつくった柵をコンクリートで覆っています。

・土管とその掘形

長さ約0.7m、直径約0.2mの土管を14mにわたり継ぎ合わせています。組み方と勾配から東大池の水の排水用施設であることがわかりますが、現在は機能していません。

・瓦敷

溝1を埋めたあとにつくられたもので、平瓦の破片や瓦質のレンガを細長く敷き詰めています。

Ⅳ期

・護岸石組

1974年に庭園が整備されたときに積まれたものです。

・テニスコート跡

1950年代にはこの場所にテニスコートがありました。

6. 出土遺物

Ⅱ期（近世）の盛土の中にはおびただしい量の土師器皿の破片が混入しています。また、Ⅲ期の盛土からは多くの近世の瓦が出土しましたが、中には元興寺創建時のものとみられる奈良時代の軒丸瓦片もあります。

7. まとめ

・Ⅰ期

黒色粘土層の状況から、池がこの時期に現状より西側に大きくひろがっていたと考えられます。このことから、東大池の西岸は従来想定されてきたものとはかなり異なる形状をしていた可能性があります。

・Ⅱ期（図2、3）

「真景図」では、東大池と西小池の間に石橋がかかる水路状の溝が描かれており、これが溝1に対応すると推定しています。ところが、調査の所見では、溝1に水が流れた形跡はありません。実際には水を流さずに水流を表現する「枯流れ（かれながれ）」（参考①）という造園手法があり、これにあたる可能性もあります。また、溝1の岸にある石は、石橋のたもとに据えられた「橋挟（はしばさみ）の石」（参考②）であったとも考えられます。なお、溝2も水が流れた形跡がないことから、溝1と同様の性格を想定できます。高まり2は、「真景図」にゆるやかな円丘状の地形として描かれている部分に比定できます。これは、造園手法の一つの「野筋（のすじ）」（参考③）に相当すると考えられます。

「真景図」には、建物群などを区画する施設として、竹垣や木杭の垣根、あるいは柴垣風の施設が描かれています。溝3・4は、この北側や西側に想定される建物群を取り囲む垣根の跡と考えられます。また、柱穴は柴垣の内側に描かれている数寄屋造建物の一部となる可能性があります。

反り橋に南接する「3」字形に屈曲する池岸は近世の状況と判断されます。

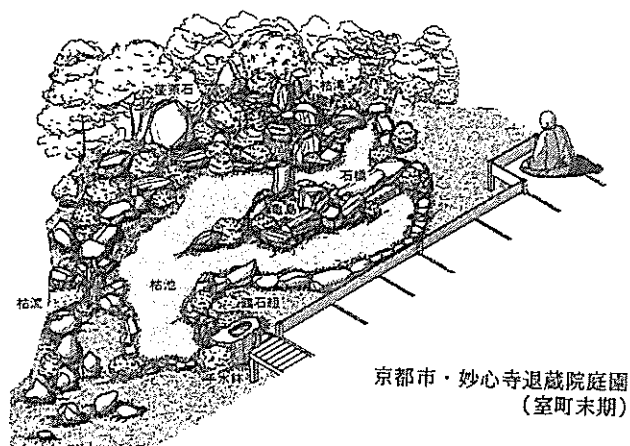
東大池の岸では前回の調査では、護岸石が検出されていますが、今回は検出されていません。池岸が大きくえぐられた状況で、垂直に近い護岸石積を抜き取ったためとも考えられます。この想定にもとづけば、前回検出された緩い勾配の石積とは隣接した場所にありながら、著しく様相が異なっていたことが分かります。また、池底の様子は、前回の調査区と同様であり、小石が敷かれていました。

前回と今回の調査成果から、「真景図」に描かれた大乘院庭園の様相は架空のものではないということが、より一層明確になってきました。従って、今回の調査区の更に西側に西小池の主要部分が広範に展開していることは明らかでしょう。大乘院庭園をより一層解明するためには、今後この部分についての発掘調査を進めていく必要があるでしょう。

(参考) 造園用語の解説

① 枯流れ<かれながれ> (参考図1)

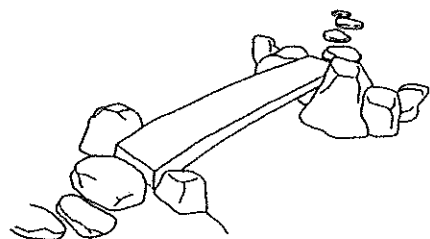
実際には水を流さずに、水流の感じを出したもので、枯山水における手法の一つで、この他類似の手法に枯滝・枯池があります。流れの床に砂、砂利などを敷き、その両側に石組などを設けて植樹をおこなうことがあります。飛び石を置いたり石橋を架けることもあります。



参考図1 枯流れ
(宮元健次著『図説 日本庭園のみかた』1998 学芸出版社より)

② 橋袂の石<はしはさみのいし> (参考図2)

庭の石橋等の袂で、橋を挟み込むように据える石。橋石の4隅に4つ、あるいはそれ以下の石を置く場合が多くみられ、石橋の安定と見た目のバランスを整える効果を持ち、枯山水にも多用されます。



参考図2 橋袂の石
(造園修景大辞典編集委員会編『造園修景大辞典』1980 同朋舎出版より)

③ 築山<つきやま>、野筋<のすじ>

庭園内に築かれた人工の盛り上り。山岳や野辺の風景を庭内に持ち込もうとしたもので、高い山を築山、ゆるやかな丘状の起伏や築山の緩い斜面を野筋と呼びます。

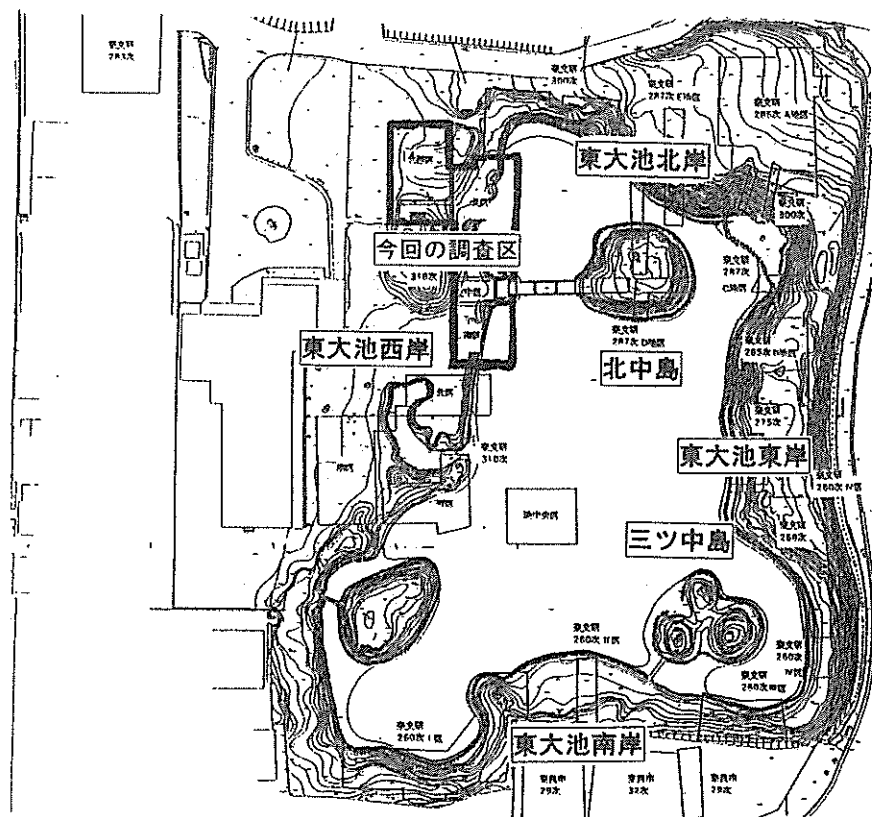


図1 大乘院庭園
発掘調査地位置図



図2 大乘院四季真景図(森家所蔵)

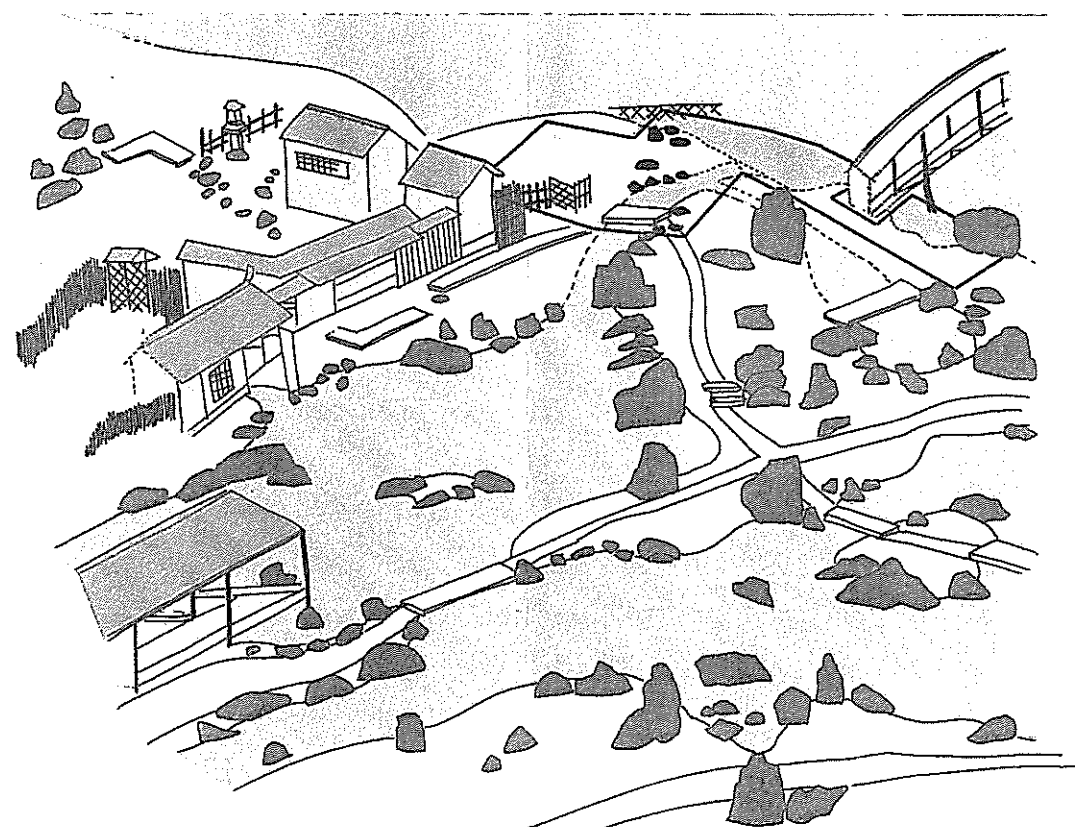
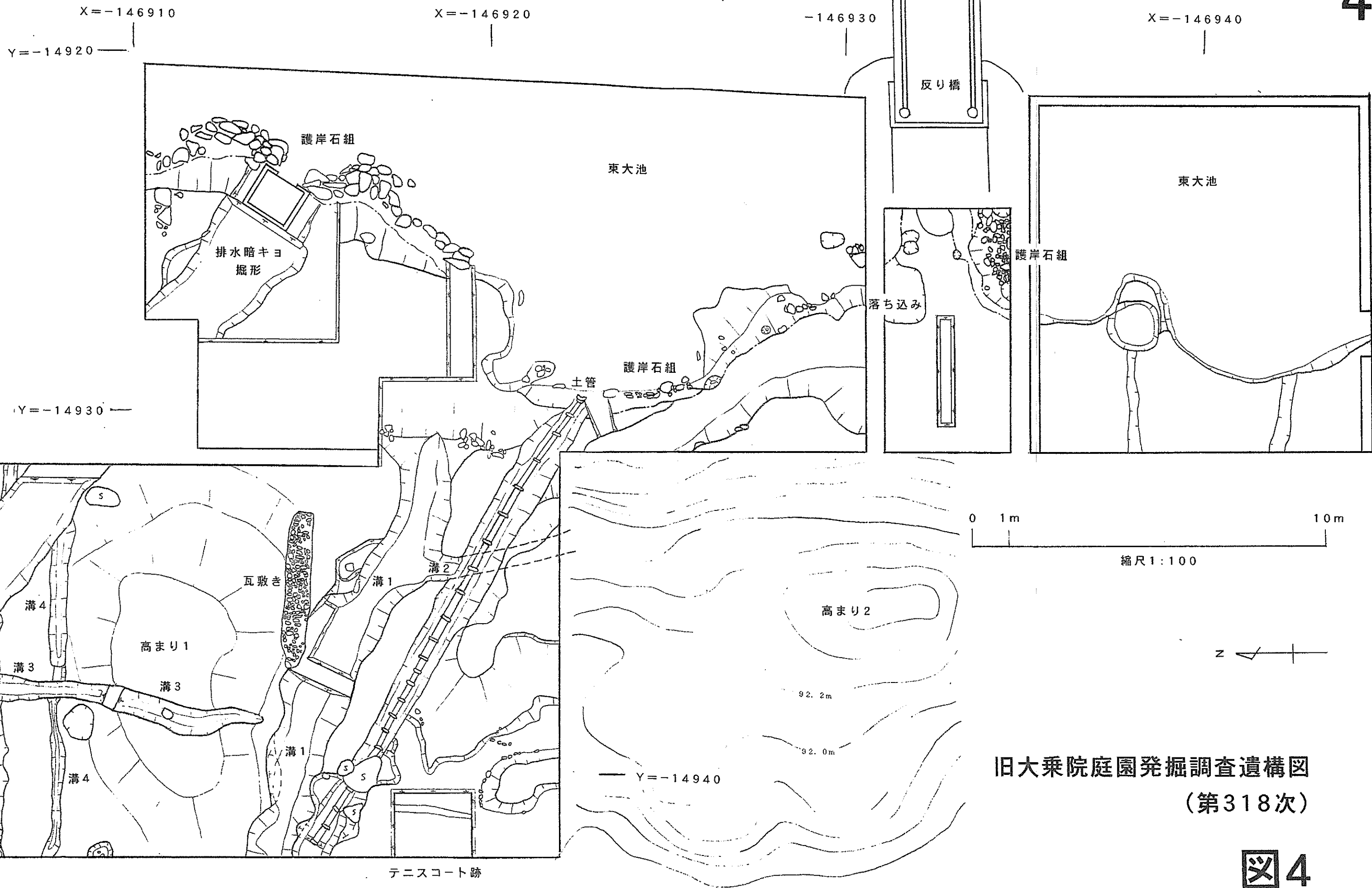


図3 真景図よりみた調査区周辺の状況

(庭園構成要素のうち、地形等を模式的にあらわした。推定部分は破線で示した。)



旧大乘院庭園発掘調査遺構図
(第318次)

図4